芥川龍之介全集

第[illegible]

芥川龍之介全集

第六卷

昭和三年八月二十日印刷
昭和三年八月二十五日發行

芥川龍之介全集第六卷

著作者　芥川龍之介
發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段(33)一〇二二番　一〇二二番
一二〇八番　一二八一番
振替口座東京七四四一六番

（寺島製本）

第六卷目錄

支那遊記

自序　起　一頁

上海游記　起　三頁

一海上　二第一瞥(上)　三第一瞥(中)　四第一瞥(下)　五病院

六城内(上)　七城内(中)　八城内(下)　九戲臺(上)　十戲臺(下)

十一章炳麟氏　十二西洋　十三鄭孝胥氏　十四罪惡　十五

南國の美人(上)　十六南國の美人(中)　十七南國の美人(下)　十八

李人傑氏　十九日本人　二十徐家滙　二十一最後の一瞥

江南游記　起　四頁

前置き　一車中　二車中(承前)　三杭州の一夜(上)　四杭州の

一夜(中)　五杭州の一夜(下)　六西湖(一)　七西湖(二)　八西湖(三)

九西湖(四)　十西湖(五)　十一西湖(六)　十二靈隱寺　十三蘇州

城内(上)　十四蘇州城内(中)　十五　蘇州城内(下)　十六天平と　六一頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

靈巖と(上)　十七　天平と靈巖と(中)　十八　天平と靈巖と(下)　十九
寒山寺と虎邱と　二十　蘇州の水　二十一　客棧と酒棧　二十二　大
運河　二十三　古揚州(上)　二十四　古揚州(中)　二十五　古揚州(下)
二十六　金山寺　二十七　南京(上)　二十八　南京(中)　二十九　南京(下)

長江游記　起一四三頁

前置き　一　蕪湖　二　溯江　三　廬山(上)　四　廬山(下)

北京日記抄　起一五六頁

一　雍和宮　二　辜鴻銘先生　三　十刹海　四　胡蝶夢　五　名勝

雜信一束　起一六九頁

澄江堂雜記　起一七七頁

雜筆　起一七九頁

竹田　奇聞　芭蕉　蜻蛉　子供　十千萬堂日錄　隣室　若さ
痴情　竹　貴族　井月　百日紅　大作　水怪　器量　誤謬

不朽　流俗　木犀　Butlerの說　今夜　夢　日本畫の寫實　理解
茶釜の蓋置き　西洋人　粗密と純雜
京都日記　起一九八頁
點心　起二〇五頁
夏雄の事　冥途　長井代助　嘲魔　池西言水　托氏宗教小說
印稅　日米關係　Ambrose Bierce　むし
鑑定　起二一六頁
骨董羹　起二一九頁
本の事　起二三七頁
支那の畫　起二四二頁
大正十二年九月一日の大震に際して　起二四五頁
一大震雜記　二大震日錄　三大震に際せる感想　四東京人
五廢都東京　六震災の文藝に與ふる影響　七古書の燒失を惜

しむ

澄江堂雜記

起二六〇頁

一大雅の畫　二にきび　三將軍　四毛生え藥　五藝術至上主義　六一切不捨　七赤西蠣太　八釣名文人　九歷史小說

十世人　十一火渡りの行者　十二俊寛　十三漢字と假名と

十四希臘末期の人　十五比喩　十六告白　十七チャプリン

十八あそび　十九塵勞　二十イバネス　二十一船長　二十二相撲　二十三「とても」　二十四續「とても」　二十五猫　二十六丈艸の事　二十七版數　二十八家　二十九放屁　三十袈裟と盛遠　三十一後世　三十二德川末期の文藝

野人生計事

起二八八頁

一清閑　二室生犀星　三ピエル・ロティの死　四春の日のさしたる往來をぶらぶら一人歩いてゐる　五蒐集　六妄問妄答　七

梅花に對する感情　八暗合　九コレラ　十長崎　十一東京田

端

鴉片　起三〇七頁

案頭の書　起三一二頁

雜記　起三一八頁

伊東から　ちろり「みやらび」「今戸の猫」松　變遷　或抗議

艶福　猪・鹿・狸　しるこ

槐　起三三〇頁

輕井澤で　起三三二頁

澄江堂雜記　起三三五頁

一夏目先生の書　二霜の來る前　三澄江堂　四雅號　五シ

ルレルの頭蓋骨　六美人禍　七放心　八同上

身のまはり　起三三九頁

病中雜記　起三四二頁
夢　起三四六頁
文藝的な、餘りに文藝的な　起三四八頁
一「死者生者」　二時代　三日本の文藝の特色　四アナトオル・フランス　五自然主義　六ハムズン　七語彙　八コクトオの言葉　九「若し王者たりせば」　十二人の紅毛畫家
東北・北海道・新潟　起三五五頁
都會で　起三六〇頁
耳目記　起三六四頁
わが家の古玩　起三六六頁
問に答ふ　起三六九頁
私と創作　起三七一頁
はつきりした形をとる爲めに　起三七四頁

鈴木君の小說　起三七六頁
女形次第で　起三七七頁
大正八年の文壇　起三七八頁
一つの作が出來上るまで　起三八一頁
一番氣乘のする時　起三八四頁
短歌雜感　起三八七頁
文學好きの家庭から　起三九一頁
漢文漢詩の面白味　起三九三頁
佛蘭西文學と僕　起三九八頁
「昔」　起四〇二頁
永久に不愉快な二重生活　起四〇五頁
イズムと云ふ語の意味次第　起四〇七頁
「新潮」月評の存廢を問ふ　起四〇九頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「新潮」文壇沈滯の所以を問ふ　起四一一頁
「新潮」大正十二年度の計畫を問ふ　起四一三頁
「婦人畫報」如何なる女人を好むかを問ふ　起四一五頁
「改造」プロレタリア文藝の可否を問ふ　起四一八頁
「中央公論」徹宵作文の感を問ふ　起四二一頁
「新家庭」旅行と女人に關する感想を問ふ　起四二三頁
「文章倶樂部」東京に關する感想を問ふ　起四二七頁
蒐書　起四三〇頁
わが俳諧修業　起四三二頁
思つてゐるありの儘を　起四三四頁
「婦人の國」戀愛及結婚觀を問ふ　起四三六頁
一人の無名作家　起四四〇頁
娼婦美と冒險　起四四二頁

我机　起四四四頁
又一說？　起四四五頁
亦一說？　起四四七頁
その頃の赤門生活　起四四八頁

雜纂

葬儀記　起四五一頁
俳畫展覽會を觀て　起四五三頁
「バルタザアル」の序　起四五九頁
有島生馬君に與ふ　起四六一頁
西洋畫のやうな日本畫　起四六三頁
神祕主義　起四六六頁
教訓談　起四六八頁
八寶飯　起四七〇頁

思ふままに　起四七五頁
或自警團員の言葉　起四七八頁
鏡花全集目錄開口　起四八〇頁
解嘲　起四八二頁
病牀雜記　起四八八頁
斷片　起四九〇頁
若楓　蓑　鴉
近松さんの本格小說　起四九一頁
文藝雜談　起四九四頁
貝殼　起五〇一頁
女仙　起五一一頁
「文藝講座」　起五一三頁
文藝一般論　起五一五頁

文藝鑑賞　起五三九頁
侏儒の言葉　起五五五頁
追憶　起六四三頁
本所兩國　起六六七頁
文藝的な、餘りに文藝的な　起七〇五頁
一「話」らしい話のない小說　二谷崎潤一郎氏に答ふ　三僕　四
大作家　五志賀直哉氏　六僕等の散文　七詩人たちの散文
八詩歌　九兩大家の作品　十厭世主義　十一半ば忘れられた
作家たち　十二詩的精神　十三森先生　十四白柳秀湖氏
十五「文藝評論」　十六文學的未開地　十七夏目先生　十八メ
リメエの書簡集　十九古典　二十ジヤアナリズム　二十一正
宗白鳥氏の「ダンテ」　二十二近松門左衞門　二十三模倣　二十
四代作の辯護　二十五川柳　二十六詩形　二十七プロレタリ

ァ文藝　二十八國木田獨歩　二十九再び谷崎潤一郎氏に答ふ
三十「野性の呼び聲」　三十一「西洋の呼び聲」　三十二批評時代
三十三新感覺派　三十四解嘲　三十五ヒステリィ　三十六人
生の從軍記者　三十七古典　三十八通俗小說　三十九獨創
四十文藝上の極北

西方の人　起七八三頁
續西方の人　起八一一頁
十本の針　起八二九頁
小說作法十則　起八三七頁
或舊友へ送る手記　起八四三頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com